

韓国語の感嘆文「N ㄷ A.」が成立するための語用論的条件

上田 裕

1. はじめに

韓国語では、「名詞＋「ㄷ」＋形容詞」(以下、「N ㄷ A.」)という文型が、感嘆文として用いられることがある。次の(1)は月が明るいことに、(2)は天気が良いことに、話し手が感嘆する気持ちを表現している。

(1) 달도 밝다! (『표준국어대사전』) (明るい月だなあ!)

月も 明るい

(2) 아유, 날씨도 좋다. (やあ、素晴らしい天気だなあ。) (『朝鮮語辞典』)

やあ 天気も よい

「ㄷ」は、日本語の副助詞「も」と多くの場合対応する。(3)の日本語は、(4)のように、「ㄷ」を用いて表すことができる。

(3) 太郎も来た。

(4) 다르도 왔다. (太郎も来た。)¹

太郎 も 来る-(過去)

(1)と(2)は、それぞれ「月も明るい!」、「やあ、天気もよい。」と逐語訳することができる。しかし、これらの文は、月や天気のほか「明るいもの」、「よいもの」があることを含意せず、感嘆文として成立することが可能である。

一方、次の(5)や(6)のように、この文型が、感嘆文として成立しない場合もある。

(5) (野原で、美しいバラの花を見つけた)

#장미도 예쁘다.²

バラも 美しい

(6) (はじめて訪れた友人宅を見て)

#집도 크다.

家も 大きい

美しいバラの花や大きな家を見たとき、人はしばしば、その美しさや大きさに感嘆する。しかし、(5)や(6)の状況では、「N ㄷ A.」を感嘆文として用いることはできない。(1)や(2)の状況では、「N ㄷ A.」を感嘆文として使えるのに対し、(5)や(6)の状況では、それを感嘆文として使えないのはなぜか。本稿は、「N ㄷ A.」が感嘆文として成立するための条件について、語用論的な観点から考察を試みたい。

なお、感嘆文として用いられる「N ㄷ A.」は、他者への伝達意図をもって発話する場合とそうでない場合の両方で使うことができる。本稿は、他者への伝達意図をもたずに発話する文を対象として、考察をおこなう³。

2. 先行研究

韓国語の助詞は、大きく「格助詞」と「補助詞」の二種類に分けられる⁴。格助詞とは、体言と結合した他の成分との格関係を表す助詞であり、補助詞とは、体言の意味内容に特別な意味を添加する助詞である⁵。「도」は、補助詞に分類される。

「도」の基本義は、一般に、「역동 (亦同)」あるいは「역시 (亦是)」と記述される。「역동」と「역시」は、いずれも「～もまた同様に」という意味である⁶。

崔鉉培(1937)は、「역시 (～もまた同様に)」という意味を表す「도」を「한가지도움도 (同一補助詞)」に分類する一方、次の(7)や(8)のような「N도 A.」文型における「도」は、「느낌도써 (感動助詞)」に分類している。

(7) 사람도 많다. (崔鉉培(1937: 886)) (たいへんな人出だなあ。)

人 も 多い

(8) 달도 밝다. (崔鉉培(1937: 886)) (明るい月だなあ。)

月 も 明るい

このように、「N도 A.」における「도」が、話し手の感動を表現する場合があることは、早くから指摘されている⁷。

金鑑炳(1982: 126)は、次の(9)や(10)のように、「도」が結合する体言を受ける述語が形容詞である場合、大部分が「感嘆」という文脈の意味を表すと述べている。

(9) 사람도 많다. (たいへんな人出だなあ。)

人 も 多い

(10) 아유 날씨도 좋다. (やあ、すばらしい天気だなあ。)

やあ 天気も よい

これらの例における述語「많다 (多い)」、「좋다 (よい)」は、体言の性質と状態がどのようなかを描く形容詞であるため、自然に話者の気持ちと語調が表現されるという⁸。

次の(11)における「높다 (高い)」は、体言の性質や状態のありさまを描く形容詞であるという点で、(9)や(10)における「많다 (多い)」、「좋다 (よい)」と共通している。にもかかわらず、(11)の状況では、「N도 A.」を感嘆文として用いることはできない。

(11) (はじめて南山タワーを見て)

#남산타워도 높다.

南山タワーも 高い

(9)と(10)では、「N도 A.」が感嘆文として成立するのに対し、(11)では、それが感嘆文として成立しないのはなぜか。「도」に関する研究は多く蓄積されており、「N도 A.」を感嘆文として使えることは、すでに指摘されている。しかし、これまでの研究の多くは、「도」の意味機能を記述する段階にとどまっており、「N도 A.」がどのような状況で感嘆文として成立するのかという語用論的な観点からの考察はおこなわれていない。従来の研究によっては、(9)および(10)と(11)の許容度が異なる理由を十分に説明することはできない。「N도 A.」が感嘆文として成立するための語用論的条件については、考察の余地が残されている。

3. 「N도 A.」が感嘆文として成立する状況

3.1. 体験に基づいたデフォルト値から逸脱した状況

第1節で見たように、話し手が感嘆しているという点では共通しているにもかかわらず、「N도 A.」文の許容度に差異が見られる場合がある。まず、「N도 A.」が感嘆文として成立する例について見てみたい。

(12) 달도 밝다! (明るい月だなあ!) (= (1))

月も 明るい

(13) 아유, 날씨도 좋다. (やあ、すばらしい天気だなあ。) (= (2))

やあ 天気 も よい

人は日常生活の中で、月や天気の状態をしばしば知覚している。そのため、(12)や(13)における話し手の心内には、発話時以前に、「月の明るさ」、「天気の状態」に関するデフォルト値が、日常的な体験に基づいて設定されている⁹。話し手は、そのようなデフォルト値から外れた事態、すなわち、普段よりもひととき明るい月やひとときよい天気を知覚して、「N도 A.」を感嘆文として用いている。

「N도 A.」が感嘆文として成立する例には、ほかに、次の(14)や(15)がある。

(14) (川に手を入れて)

물도 차다. (水が冷たいなあ。)

水も 冷たい

(15) (外に出たら、とても強い風が吹いていた)

바람도 세다. (風が強いなあ。)

風 も 強い

水は日常生活の中で頻繁に使用するものであるため、人は、水の常温がどれくらいであるかを体験的に知っている。また、風は日常的に吹いているものであるため、普段の風の強さがどれくらいであるかを体験的に把握している。つまり、(14)や(15)における話し手の心内には、発話時以前に、水温や風の強さに関する、体験に基づいたデフォルト値が設定されている。話し手は、そのようなデフォルト値から外れた「水の冷たさ」、「風の強さ」を感じて、「N도 A.」を感嘆文として用いている。

「N도 A.」が感嘆文として成立しない例には、次の(16)や(17)がある。

(16) (はじめて訪れた友人宅を見て)

#집도 크다. (= (6))

家も 大きい

(17) (はじめて南山タワーを見て)

#남산타워도 높다. (= (11))

南山タワー も 高い

これらの状況における話し手は、友人宅や南山タワーをはじめて訪れている。そのため、体験に基づいたデフォルト値は、心内に設定されていない。このような状況では、「N도 A.」を感嘆文として用いることはできない。

デフォルト値には、一般的知識に基づいて設定されるものと体験に基づいて設定されるものがある。先に見た(12)から(15)では、後者の方式に基づいて、デフォルト値が設定されている。

(16)や(17)における話し手は、それぞれ、友人宅が大きい、南山タワーが高いと感じていることから、知覚した事態を「家の一般的な大きさ」、「建築物の一般的な高さ」という一般的知識に基づいて設定されたデフォルト値から外れたものととらえていることがわかる。一方、話し手は、友人宅、南山タワーをはじめ知覚していることから、発話時以前に、体験に基づいたデフォルト値は設定されていない。このような状況では、「N㉮ A.」を感嘆文として用いることはできない。

以上で見たように、「N㉮ A.」を感嘆文として用いるためには、知覚した事態の状態や性質が、体験に基づいたデフォルト値から外れている必要がある。このことは、以下の例の対比からも見て取ることができる。

次の(18)における話し手は、バラを日常的に目にしている。そのため、発話時以前に、体験に基づいたデフォルト値が話し手の心内に設定されている。話し手は、そのようなデフォルト値から外れた「バラの美しさ」を感じて、「N㉮ A.」を感嘆文として用いている。

(18) (自宅でバラの花をたくさん育てているバラの愛好家が、一週間前に咲いたバラの花を眺めて)

장미도 예쁘다. (美しいバラだなあ。)

バラも 美しい

一方、次の(19)における話し手は、バラをはじめ知覚している。そのため、体験に基づいたデフォルト値は、心内に設定されていない。このような状況では、「N㉮ A.」を感嘆文として用いることはできない。

(19) (野原で、美しいバラの花を見つけた)

#장미도 예쁘다. (= (5))

バラも 美しい

(18)と(19)における許容度の差異は、「N㉮ A.」を感嘆文として用いるためには、知覚した事態の状態や性質が、体験に基づいたデフォルト値から外れている必要があることを如実に示している。

3.2. 期待値から逸脱した状況

3.1.では、体験に基づいたデフォルト値から逸脱した事態を知覚した状況で、「N㉮ A.」を感嘆文として使えることを見た。3.2.では、そのような基準によっては説明できない例について見てみたい。

次の(20)では、子供をその場ではじめて知覚した場合であっても、「N㉮ A.」を感嘆文として使うことができる。言い換えれば、話し手の心内に、体験に基づいたデフォルト値が設定されていなくとも、「N㉮ A.」を感嘆文として用いることが可能である。

(20) (目の前で、子供が大きな石を持ち上げた)

힘도 세다. (すごい力だなあ。)

力も強い

この状況では、子供が大きな石を持ち上げるのは難しいだろうという予想をしやすい。話し手の心内には、子供がおこなう行為の実現可能性に対する期待値が、低く設定されている。(20)における話し手は、非力であるはずの子供が大きな石を持ち上げたという期待値から外れた事態を知覚して、「N도 A.」を感嘆文として用いている。このように、期待値から逸脱した事態を知覚した状況では、体験に基づいたデフォルト値が設定されていなくとも、「N도 A.」を感嘆文として使うことができる。

(20)と同様の文が不自然になる状況もある。次の(21)のように、体格のよい男性が大きな石を持ち上げるという行為を見たとき、人はしばしば感嘆の気持ちを抱く。にもかかわらず、この状況では、(20)のような文は、きわめて成立しにくい。

(21) (目の前で、筋骨隆々の男が大きな石を持ち上げた)

#힘도 세다.

力も強い

この状況では、筋骨隆々の男性が大きな石を持ち上げるのは容易だろうという予想をしやすい。行為の実現可能性に対する話し手の期待値は、高く設定されている。したがって、この状況における話し手は、男が石を持ち上げるのを見ても、それが期待値から外れた事態であるとはとらえにくい。この状況で、「N도 A.」を感嘆文として用いにくいのは、そのためである。

本節で見たように、「N도 A.」は、体験に基づいたデフォルト値や期待値から逸脱した事態を知覚した状況で、感嘆文として用いることができる。発話時以前に、対象に関するデフォルト値や期待値が設定されているということは、話し手にとって、対象の存在は前提となっているということである。感嘆を表す「N도 A.」は、存在が前提となっている事物の状態や性質が、予想や普段の様子から逸脱した甚だしさを帯びていると感じ、しみじみと感嘆する、言い換えれば、詠嘆する状況で用いられる¹⁰。

4. 形容詞の共起制限に関する問題

先行研究では、感嘆を表す「도」と共起する形容詞には、共起制限があると指摘されている。洪思満(1979: 155)によれば、「도」は、感嘆的、強意的特性が他の特殊助詞に比べて強く、感嘆助詞のような性格を有するという。また、次の(22)や(23)に見られるように、「도」は極大程度に対する話し手の誇張された感情を表すため、共起する形容詞が制限されると述べている。

(22) a. 사람도 많은 공원. ((なんと)人の多い公園。)

人も多い公園

b. *사람도 적은 공원. (洪思満(1979: 146)を一部改変)

人も少ない公園

- (23) a. 피해도 컸던 화재. ((なんと) 被害の大きかった火災)
 被害も大きい-(過去) 火災
- b. *피해도 작았던 화재. (洪思滿(1979: 146)を一部改変)
 被害も少ない-(過去) 火災

話し手の感動は、程度量の極大や拡張によって誘発されるという。そのため、「도」は「많다 (多い)」、「크다 (大きい)」といった「拡大された (booster) 形容詞」と共起すると述べている¹¹。これらの例は、本稿が扱う「N도 A.」構文ではないが、「도」が感嘆や強調の意味を帯びているという点では共通している。

「N도 A.」構文に「많다 (多い)」という形容詞を用いて、数量の多さに感嘆する気持ちを表現することもできる。次の(24)における話し手は、期待値から逸脱した荷物の数量の多さに感動を誘発され、「N도 A.」文を用いている。

- (24) (引越しの手伝いに行ったところ、荷物が予想以上に多かった)
 짐도 많다. (荷物が多いなあ。)
 荷物も 多い

一方、次の(25)に示すように、「N도 A.」に「적다 (少ない)」という形容詞を用いて、数量の少なさに感嘆する気持ちを表現することもできる。

- (25) (引越しの手伝いに行ったところ、荷物が段ボール3箱分しかなかった)
 짐도 적다. (荷物が少ないなあ。)
 荷物も 少ない

この状況における話し手は、発話時以前に、荷物は自分が手伝わなければならないほど多いだろうという予想をしやすい。話し手は、「荷物は多いだろう」という期待値から大きく外れた事態を目にして、「N도 A.」を感嘆文として用いている。このことは、次の(26)のように、話し手の心内に期待値が設定されていない状況では、同様の文が成立しないという事実によって裏づけられる。

- (26) (友人宅を訪れたところ、たまたま引越し作業をしていた。引越しの荷物を見たところ、段ボール3箱分しかなかった)
 #짐도 적다.
 荷物も 少ない

(25)のような例から、「도」は、数量が多いことだけでなく、数量が少ないことによって誘発された話し手の感動も表現できることがわかる。

ここで、先に見た(22b)と(23b)が成立しないのはなぜかという問題について考えてみたい。常にたくさんの人がある公園はそれほど多くないため、公園にいる人が少ないという状況を目にした場合、人はそれを想定範囲内の事態ととらえやすい。また、火災の被害は大きい場合よりも小さい場合の方が、現場の本来の状態に近く、眼前の状況を想定範囲内の事態ととらえやすい。想定範囲内の事態を知覚した場合、感嘆の気持ちは生じにくい。(22b)と(23b)が不自然であると判断されるのは、公園に人が少ないことや、火災の被害が小さいことに感嘆する状況を想像しにくいためであると考えられる。

5. おわりに

本稿は、「N ㅏ A.」が感嘆文として成立するための条件について、語用論的な観点から考察をおこなった。感嘆文「N ㅏ A.」は、存在が前提となっている事物の状態や性質、数量の多寡が、体験に基づいたデフォルト値あるいは期待値から逸脱した甚だしさを帯びていると感じ、話し手がしみじみと感嘆する、言い換えれば、詠嘆する状況で成立する。

「N ㅏ A.」における「ㅏ」の感嘆用法は、対照言語学的な見地から見ても興味深い。次の(27)や(28)は、「なあ」のような終助詞を加えない限り、感嘆文としては、きわめて成立しにくい¹²。

(27) 月も明るい。 (cf. 月も明るいなあ。)

(28) 天気もいい。 (cf. 天気もいいなあ。)

「ㅏ」ともっとも多く対応する中国語の形式には“也”があるが、次の(29)や(30)のような中国語文は、感嘆文としては用いられない¹³。

(29) 月亮 也 很 亮。 (月も (とても) 明るい。)

月 も とても 明るい

(30) 天气 也 很 好。 (天気も (とても) いい。)

天气 も とても いい

このように、「N も A。」や“N 也 A。”は、基本的に、感嘆文として用いることはできない。「N ㅏ A.」という文型が感嘆文として成立することは、韓国語に特徴的な現象であることがわかる。

¹ 出典を明記していない例文は、作例である。韓国語の例文の許容度判断は、京畿道出身の韓国人女性インフォーマント二名に依頼した。

² 「#」は、当該表現が文法的には成立するが、語用論的には不自然であることを表す。

³ 노대균(1981: 175)は、感嘆文を「独白的感嘆文」と「伝達の感嘆文」に分類している。独白的感嘆文とは、「聞き手がいない発話状況で、話し手が独り言として、ある気持ちを述べる文である」という。発話の場に聞き手が存在するにもかかわらず、話し手が聞き手を意識せずに発話する文も、このタイプに属すとされる。伝達の感嘆文とは、聞き手の発話内容や出来事などへの反応として、命題内容に対する気持ちを伝達する文であるという。伝達の感嘆文の例としては、「A: 김선생님이 저기 옵니다. (金先生があちらから来ます。) B: 아, 김선생님이 저기 오네요! (ああ、金先生があちらから来るんですね!）」という会話文におけるBの発話を挙げている。本稿の考察対象は、独白的感嘆文である。独白的感嘆文と伝達の感嘆文については、ほかに、노대균(1997: 32-38)を参照。

⁴ 補助詞は、「補助助詞」、「補助助詞」、「補助助詞」、「特殊助詞」、「特殊助詞」、「도움토씨」、「두루도」とも呼ばれる。

⁵ 金鑑炳(1982: 108)を参照。

⁶ 「ㅏ」の意味については、洪思滿(1986)や홍사만(2002)のように、「동류 제시 (同類提示)」と記述する研究や、황화상(2012)のように、「유사항의 추가 (類似項の追加)」と記述する研究などもある。

⁷ 洪思滿(1979: 155)は、「ㅏ」は他の特殊助詞に比べて、感嘆的、強意的特性が強く、感嘆助詞のような性格をもつと述べている。황화상(2012: 375)は、「참 달도 밝다. (とても明るい月だなあ。)」という感嘆文における「ㅏ」の意味を「強調」と記述している。

⁸ 「N ㅏ A.」構文に用いられる「ㅏ」が感嘆を表すとする研究には、ほかに、洪思滿(1979)や윤재원(1985)などがある。윤재원(1985: 12-13)は、体言につく「ㅏ」の主機能は、「亦是」または「同類」

という意味を表示することであり、「強調」や「感嘆」といった意味の表示は副次的機能であると述べている。「感嘆」を表す例としては、「달도 매우 밝다. (とても明るい月だなあ。)」という文を挙げている。

9 児玉(2008: 1224)は、デフォルトを「ある情報が欠如していても、その情報が推断によってあたかも既定値のように扱われるもの」と定義している。

10 益岡(1991: 87)は、日本語の感嘆型の表現を「詠嘆系の感嘆型」と「驚嘆系の感嘆型」に分けている。前者の典型は、表現時に観察される事態に対する表現者の感動の気持ちを表出するものであるという。後者は、所与の事態の存在に対する驚きを表すタイプであるという。感嘆文として用いられる「N도 A.」は、驚嘆系よりも詠嘆系に近い性質をもつ。なお、益岡(2002: 80)と澤田(2004: 161)では、驚き、感嘆、詠嘆は、連続した感情表現であることが指摘されている。

11 洪思満(1986: 164)でも、洪思満(1979: 155)と同様の指摘がなされている。

12 「も」に詠嘆を表す用法がないわけではない。寺村(1991: 91)は、「その財布もずいぶん古くなりましたね」や「用助ども、老いたな」といった例を挙げ、「X〔普通名詞〕モ+P〔肯定〕」という形式が、「詠嘆」という言葉以外には適当な言い表わしかたがないような情緒的な効果を生む場合があると指摘している。「も」の詠嘆用法については、澤田(2004)が詳しい。

13 月の明るさや天気よさに感嘆する場合、中国語では、“今天的月亮好亮！（今日の月はとても明るい！）”、“今天天气真好！（今日は天気がじつにいい！）”のように、“好（とても）”や“真（じつに）”といった程度副詞を使った表現が用いられる。

参考文献

- 児玉徳美(2008). 「デフォルト解釈の見直し」, 『立命館文學』 606 : pp. 1225-1212。
- 澤田美恵子(2004). 「いわゆる詠嘆の「も」について—対象の再認識という心的処理—」, 『日本語文法』 4(2) : pp. 153-168。
- 寺村秀夫(1991). 『日本語のシンタクスと意味 第III巻』。東京：くろしお出版。
- 益岡隆志(1991). 『モダリティの文法』。東京：くろしお出版。
- 益岡隆志(2002). 「定表現と非定表現と不定表現」, 『国語論究 第10集 現代日本語の文法研究』 : pp. 68-92。
- 金鑑炳(1982). 「助詞 ‘도’ 의 用法과 意味」, 『국어교육』 41 : pp. 105-134。
- 노대규(1981). 「국어의 감탄문 연구」, 『말』 6 : pp. 169-223。
- 노대규(1997). 『한국어의 감탄문』。서울：국학자료원。
- 윤재원(1985). 「補助助詞「-도」의 機能」, 『釜山産業大學校論文集』 6 : pp. 7-21。
- 崔鉉培(1937). 『우리말본』。京城：延禧專門學校出版部。
- 洪思満(1979). 「助詞「도」의 意味分析」, 『語文學』 38 : pp. 125-158。
- 洪思満(1986). 『改訂版 國語特殊助詞論』。서울：學文社。
- 홍사만(2002). 『국어 특수조사 신연구』。서울：역락。
- 황화상(2012). 『국어 조사의 문법』。서울：지식과 교양。

辞書

- 小学館・韓国金星堂出版社編(1993). 『朝鮮語辞典』。東京：小学館。
- 국립국어연구원(1999). 『표준국어대사전』。서울：두산동아。